

【令和4年度 全国学力・学習状況調査結果分析】

〔全国学力・学習状況調査の目的〕

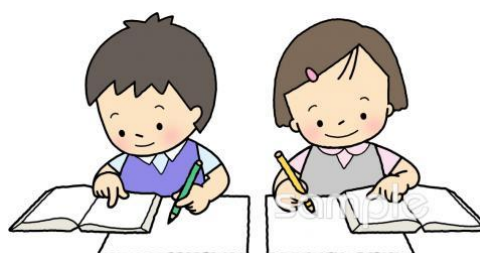
義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

そこで、本年度は、4月19日（火）に全国の小学校6年生、中学3年生を対象に実施し、本校の6年生も国語、算数、理科を行いました。調査結果は、次のとおりです。

〔本校の学力・学習状況調査の結果について〕

1 山梨県・全国の平均正答率との比較

- 国語・・・山梨県・全国を下回る。
- 算数・・・山梨県・全国を下回る。
- 理科・・・山梨県・全国を下回る。



2 問題別における本校における各教科の課題

※問題別とは以下の観点において分類された問題形式になります。

選択式	記号を選び解答するもの
短答式	本文中からのぬき出しや書き換え、数値、数式などを単語や比較的短い文章によって解答するもの
記述式	答えの求め方や考え方、解答や評価などを文章で解答するもの

- ・国語では選択式及び記述式の正答率が全国、県の正答率と近く、短答式の問題が大きく下回っており課題となっています。
 - ・算数では短答式の正答率が県、全国と同等となっていますが、選択式が県、全国の正答率より低くなっており、さらに記述式では県、全国の正答率を大きく下回っています。
 - ・理科では短答式と記述式の問題が、県、全国の正答率を大きく下回っています。
- 3 学習指導要領の内容・領域にみる本校における各教科の課題
- ・国語では、思考力、判断力、表現力等における「話すこと・聞くこと」「読むこと」の内容に関する設問では、県、全国を上回る正答率のものや、平均に近い正答率のものが増えてきています。特に「話すこと・聞くこと」における「必要なことを質問し、相手が伝えたいことや自分の聞きたいことの内容の中心を捉える」ことや、「読むこと」における「表現の効果を考える」趣旨の設問では、県、全国の正答率を上回る結果となっています。しかし、「書くこと」の正答率は県、全国を下回っています。また、知識及び技能においては、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の「話し言葉と書き言葉の違いを理解する」趣旨の設問で県、全国の正答率を大きく上回っています。しかし、同事項では「漢字を文中で正しく使う」ことが3問中2問で県、全国の正答率を下回っていて課題となっています。
 - ・算数では、「数と計算」「図形と測定」「データの活用」が、県、全国の正答率を大きく下回る結果となりました。「数と計算」の「被乗数に空位のある整数の乗法の計算をすることができる」及び「変化と関係」の「百分率で表された割合と基準数から、比較量を求めることができる」「伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答えを記述できる」の趣旨の設問では県、全国の正答率を上回っています。
 - ・理科では、「エネルギー」「粒子」「地球」を柱とする領域で、いずれも県、全国の正答率を大きく下回る結果となりました。特に、「粒子」を柱とする領域で、実験器具の名称や「自分の予想と実験の結果をもとに、問題に対するまとめを検討して、改善し、自分の考えを持つことができる」趣旨の設問の正答率が低くなっています。「生命」を柱とする領域では、「問題を解決するために必要な観察の視点


を基に、問題を解決するまでの道筋を構想し、自分の考えを持つことができる」趣旨の設問に対する正答率は、県、全国を大きく上回っています。

〔学力向上に関わる実践的な取り組みについて〕

2, 3の結果を受けて、学力の向上のため、以下のような取り組みをさらに充実させていきたいと考えます。

- ・すべての教科において、基礎的な学習の定着を徹底し、それを生かし、活用しながら問題を解決していく課題を設定する。
- ・算数や理科において記述式の設問の正答率が低いため、いずれの教科においても、課題内容を筋道立てて考え、理由を記述する学習を意図的に取り入れていく。特に、国語の授業において、「書く活動」を重視した言語活動をさらに多く取り入れていく。その中で、課題に対して理由や根拠を基に自分の考えをまとめたり、相手の話の目的や意図を捉えて聞き、自分の考えと比べ、共通点や相異点などを整理し、自分の考えをまとめ直せたりするような、工夫した「書く活動」を意図的に仕組み、全教科における課題の改善を図る。また、基礎的な知識、理解、技能を身につけさせるために、反復的な学習はもちろん、学習感想や日記、短文作文等、すべての教科の中で「書く活動」を増やし、日常的に文章を書くことの抵抗感を軽減し、さらに漢字や言語を使う意識を高めていく。

〔質問調査の主な特徴〕

県や全国の結果より上回っていた質問	県や全国の結果より下回っていた質問
「携帯電話・スマートフォンやコンピューターの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか」	「自分には、よいところがあると思いますか」
「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦していますか」	「学校に行くのが楽しいと思いますか」
「読書は好きですか」	「自分とちがう意見について考えるのは楽しいと思いますか」
「今住んでいる地域の行事に参加していますか」	「学校が休みの日に1日当たりどのくらいの時間、勉強しますか」
「5年生前の授業で、ICT機器をどの程度使用しましたか」	「算数の授業は好きですか」
「理科の授業は好きですか」	
「将来、理科や科学技術に関する職業に就きたいと思いますか」	
「理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか」	

※上記の表は、特に顕著なものだけを抜粋しています。

今回質問紙調査の項目にあった国語、算数、理科の中では理科に対する興味関心が高く、将来、理科や科学技術に関する職業に就きたいと思うというように将来を含め学ぶ目的意識を持って取り組んでいる児童が多いことがあきらかになりました。反面、算数には苦手意識を持っている児童が多いことから、これまで以上に基礎・基本を大切にしながら、児童にとって生涯にわたる学びにつながる、意味のある学びとなるよう、授業改善を引き続き行っていきます。

また、GIGAスクール構想に基づいて導入された、一人一台端末の有効活用が図られている結果が出てきています。ICT活用が日常となっている時代を生き抜く力を育むため、個性に合わせた教育の実現を図れるよう、さらなる有効活用を行っています。

さらに、「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に対しての結果が県、全国を下回っていることから、自己肯定感が低い児童が相当数いることが推察されます。また「学校に行くのが楽しいと思いますか」の質問に対しても下回っているのは、大きな課題だと考えます。一学期同様、6年生は学校のリーダーとして、日常生活、様々な行事を通じ活躍する場を設定し、意図的に自己肯定感を高め、成功体験を積み重ねることで児童個々が自信を持って楽しく学校生活を送れるよう支援を続けていきます。